

姉川懷古  
(榛葉竹庭)

龍攘 虎擲 碧川の頭  
虎擲 碧川の頭

聞道 僵屍 四周に列なると

大旆 雲に變ず 山月の旦

折戈 土と化す 野風の秋

水は 舊恨を淹して 蘆岸に鳴り

草は 新霜を帶びて 稲疇に臥す

唯だ 高碑の湛露に濡うあり

當年の榮辱 河流に付す

龍攘虎擲碧川頭 聞道僵屍列四周  
大旆變雲山月旦 折戈化土野風秋  
水淹舊恨鳴蘆岸 草帶新霜臥稻疇  
唯有高碑濡湛露 當年榮辱付河流

解説 織田・徳川の連合軍二万九千と、浅井・彰倉の一万八千とが近江国・姉川川畔で戦い、緒戦には織田の先鋒を破った浅井・朝倉軍も、遂に衆寡敵せず敗れ去つた。なお古戦場は長浜市の東北にあり、今はただ一基の碑石を留めるのみである。

語釈 ※龍攘虎擲||両雄の互に戦うたとえ。※僵屍||たおれた死体。※大旆||大旗。※稻疇||稻田。※湛露||しげく置いたつゆ。  
※榮辱||名譽と恥辱。

通釈 曽て青川の辺で両雄が戦い、周辺には多数の屍体が横たわつたと聞く。当時翻つた大旗は已に雲に変じて暁月が山上に掛かり、折れた刀剣は土と化して秋風が野面を吹いている。水はなお旧恨を浸すが如く芦の岸辺に咽び、草は新霜を帶びて稻田に臥している。ただ高碑のみが繁露に濡い、当時の名譽も恥辱も総て逝く河の流れに随つて、遠い過去のものとなつてしまつた。